

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2017年7月


## 博士学位申請論文審査報告書

論文題目：日本語教育のための情報収集の談話の展開方法  
—韓国人日本語学習者の会話教育の提案—

申請者氏名：小林 友美

主査 蒲谷 宏 署名 蒲谷 宏 

(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小宮 千鶴子 署名 小宮 千鶴子 

(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 戸田 貴子 署名 戸田 貴子 

(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

## <本論文の概要>

本博士学位申請論文は、韓国人日本語学習者に対する日本語の会話教育に応用することを目的として、日本語の情報収集の談話の展開方法について解明しようと試みた論考である。

本論文における「情報収集の談話」とは、「何らかの目的で、ある情報を必要とする質問者が、それに関する情報を有する応答者に対して、情報提供を口頭で求め、必要な情報を得るという一連のコミュニケーション過程のこと」であり、「学習者が質問者の場合を設定し、情報収集をする際の質問者の役割」に焦点を絞り分析している。

本論文は、「序論」（第1章）、「本論」（第2～8章）、「結論」（第9章）の全9章により構成されている。各章の概要は、以下のとおりである。

### 第1章 本研究の目的と課題

本論文は、日本語の情報収集の談話の展開方法を明らかにし、韓国人日本語学習者の会話教育への提案をすることを主な目的としている。

研究の課題としては、次の3点が設定されている。

- 課題1 日本語の情報収集の談話の展開方法には、どのような特徴があるのか。
- 課題2 日本語母語話者と韓国人日本語学習者の情報収集の談話の展開方法には、どのような特徴があるのか。
- 課題3 韓国人日本語学習者に対する会話教育において、情報収集の談話の展開方法を学習するために何が必要か。

### 第2章 先行研究

「日本語の談話分析に関する先行研究」として、「談話構造」、「話段」、「発話機能」に関する諸研究を参考にしている。

「情報収集の談話に関する先行研究」は、主に「自由会話」が分析対象なのに対し、本論文は、「質問者と応答者の役割が明確な情報収集の談話」が対象であるため、「参加者別の特徴に相違があると予想して、より詳細な分析結果を出すこと」を目的としている。また、「日本語の会話教育に関する先行研究」だけでなく、「韓国語母語話者を対象とした先行研究」を採り上げている。

### 第3章 本研究の方法

本論文では、3種類の日本語の情報収集の談話を分析対象として用いている。

(1) 情報収集の談話構造については、「発話機能」に関する先行研究の分類を用いて分析する。

(2) 情報収集の談話における質問の提出順は、各話段における質問者の〈要求〉系の発話機能の出現傾向を分析する。また、質問形式を「1.事実を求める質問」、「2.意見を求める質問」、「3.助言を求める質問」の3種に分類し、どの質問がどのように提示されるのかを明らかにする。

(3) 情報収集に用いる表現形式は、質問者の情報収集の特徴的な発話を抽出し、表現形式と発話機能を明らかにする。

以上の分析観点から、日本語の情報収集の談話の展開方法を解明している。

### 第4章 テレビのインタビュー番組における談話の展開方法

#### (1) 情報収集の談話構造

全10資料が同じ種類の話段と同じ数、同じ提出順序で分類され、基本的な談話構造があった。

#### (2) 情報収集の質問の提出順

質問形式の3分類によると、はじめにVTRの確認やテーマに関する「1.事実を求める質問」をする。次に、応答者の「2.意見を求める質問」から「3.助言を求める質問」という提出順である。

#### (3) 情報収集に用いる表現形式

インタビュアーは、主に〈要求〉の〈確認要求〉、〈説明要求〉、〈判定要求〉の3機能を用いて、ゲストから情報収集をする。また、情報収集のために、「a.応答確認」、「b.前置き+質問」、「c.話題転換」をしていた。

### 第5章 大学広報紙のインタビュー取材における談話の展開方法

#### (1) 情報収集の談話構造

3種の大話段があり、「Ⅱ.展開部」には、「活動の背景」、「バックグラウンド」、「今後の活動」、「アドバイス」の4種の話段が認定された。自然談話のインタビュー取材の談話の話段は、資料により話段の数や順番が異なり、同じ種類の話段が複数回出現

することから、複雑な構造であることが明らかになった。

## (2) 情報収集の質問の提出順

質問形式の3分類の結果から、「Ⅱ. 展開部」の大話段には、「1. 事実を求める質問」を前半部にし、後半に「2. 意見を求める質問」、最後に「3. 助言を求める質問」が用いられる。これは、インタビュー番組と同様の結果である。

## (3) 情報収集に用いる表現形式

質問者であるインタビュアーは、主に〈確認要求〉、〈判定要求〉、〈説明要求〉を用いて情報収集をする。インタビュー番組では、多くの情報を要求する〈説明要求〉を、インタビュー取材では、「はい/いいえ」で答えられる〈判定要求〉を用いて、効率よく情報収集をする。インタビュアーには、「a. 応答確認」、「b. 前置き+質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」という特徴があった。

「a. 応答確認」、「b. 前置き+質問」、「c. 話題転換」は、インタビュー番組と共通するが、自然談話であるインタビュー取材では、その他の特徴も認められた。

インタビュー取材のインタビュアーは、〈V. 受容〉の〈a. 継続〉や〈b. 承認〉のほか、〈e. 興味〉や〈f. 共感〉、〈IV. 提供〉を用いて「e. 応答に対する反応」をしたり、応答者との「f. 共通の話題」を提示したりして、話題を共有し、会話に積極的に参加していることが明らかになった。

## 第6章 学部大学生と留学生による就職活動の相談における談話の展開方法

分析の結果、学部大学生と韓国人日本語学習者の留学生とでは、情報収集の談話の展開方法に相違があることが明らかになった。

## 第7章 会話授業への応用

課題1と課題2における分析結果をまとめた。また、教材分析と2009年から2013年に至る申請者の日本語の会話クラスの授業実践における課題を通して、韓国人上級日本語学習者を対象とする会話教育への応用を提案している。

## 第8章 韓国の国立D大学の上級日本語会話クラスにおけるビジュアライゼーション活動の授業実践

第7章で提示した授業案をもとに、韓国の国立D大学において、韓国在住の日本語母語話者の協力のもとに、全2回のディジターセッション活動と会話分析活動を取り入れた授業を実施し、授業の実践報告を述べている。

## 第9章 結論と今後の課題

本論文各章の概要をまとめ、結論と今後の課題を述べている。本研究の結論は、以下の3点である。

(結論1) 日本語の情報収集の談話展開の方法に関して、日本語の3種の情報収集の談話の「1. 談話構造」、「2. 質問の提出順」、「3. 表現形式」を分析した結果、次のような共通点があることが明らかになった。

### 1. 談話構造

本研究の情報収集の談話は、質問者が応答者に対して、段階的な手順を踏んで展開するものである。分析の結果、基本的な談話構造が認められた。

### 2. 質問の提出順

「2. テーマに関する情報収集」の話段は、まず、「1. 事実を求める質問」をして、基本的情報を押さえ、次に、「2. 意見を問う質問」を、最後に、「3. 助言を求める質問」をするという典型的な提出順で展開する。

### 3. 表現形式

質問者は、「a.～f.」の様々な発話機能の組み合わせによる表現形式を用いる。全3種の資料に共通したのは、「b.前置き+質問」である。これは、質問者が応答を振り返り、要点をまとめ、応答者に質問を理解してもらう配慮をする質問である。質問者は、情報収集の目的達成に向けて、様々な表現形式を用いている。

(結論2) 日本語母語話者と韓国人日本語学習者の談話の展開方法に関して、学部大学生の就職活動の相談を分析した結果、日本語母語話者と韓国人日本語学習者で、「1. 談話構造」、「2. 質問の提出順」、「3. 表現形式」に共通点と相違点があることが明らかになった。

(結論3) 結論1と結論2における「1. 談話構造」、「2. 質問の提出順」、「3. 表現形式」を応用した「1. 情報収集の談話全体の展開方法」、「2. 情報収集の話段の展開方法」、「3. 日本語の情報収集の談話の相互作用に基づく展開方法」の3点が、情報収集の談話展開の方法を学習するために有効だと判断された。

以上の3点が日本語の情報収集の談話展開の方法を学習するために、有効か否かについて、韓国のD大学で、インタビュー活動を用いた全2回のビジターセッション活動と会話分析活動を導入した会話の授業を実践した。その結果、応答者であるビジターの評価（11設問の5段階評価）において、質問者である受講生16名中の14名が学習前よりも学習後が高く評価され、学習後の「2.質問の順番」、「3.質問の仕方」、「11.話題転換」に関する肯定的な評価記述が確認された。また、教室活動の中で学習項目を習得し、実際の会話に反映させたことも確認でき、それをビジターに評価されたことが確認できた。さらに、学習者のワークシートや意識変化を分析した結果、学習後のほうが自己評価が高く、気づきや学び、自身の日本語や会話参加への意識が変化したことが明らかになった。したがって、「1. 情報収集の談話全体の展開方法」、「2. 情報収集の話段の展開方法」、「3. 日本語の情報収集の談話の相互作用に基づく展開方法」の3項目に基づく授業実践が、情報収集の談話展開の方法を学習するために有効だと考えられる。

今後は、質問者と応答者の相互作用による情報収集の談話の展開方法をより精密に解明するとともに、本実践の反省を踏まえて、情報収集の日本語の会話教材を開発し、授業実践を重ねていく必要がある。

#### <本論文の評価>

本論文に対して評価できる点は、次のとおりである。

1. 本論文は、韓国人日本語学習者を対象とした日本語の会話教育に提言することを最終的な到達目標とし、情報収集の談話展開の方法について分析したものである。従来の研究では、質問者に焦点が当てられることが多かったが、応答者にも着目し、両者の相互作用という観点から丁寧に分析が行われている。
2. 第4章では、テレビのインタビュー番組における談話の展開方法、第5章では、大学広報誌における学生生活課の職員によるインタビュー、第6章では、学部大学生の就職内定者と就職活動中の学生による情報収集をデータとする、3種の異なる日本語母語場面の資料について、1) 談話の全体構造、2) 話段における質問の提

出順、3) 質問の表現形式の3つの観点から詳細に分析し、談話展開の方法を明らかにした。同様に、就職相談の談話について、接触場面のデータを用いて、1) 全体構造、2) 話段における質問の提出順、3) 質問の表現形式、における異同を詳細に分析している。

3. 課題1と課題2における研究成果をもとに、韓国人上級学習者を対象とする会話クラスにおける学習内容を定めて、会話分析活動と日本人留学生を迎えるビジターセッションを実践することで、日本語学習者が自身の発話を振り返って内省する力を高めるという指導法を考案し、学習者とビジターの日本人留学生の双方からの評価についても検討している。その結果、「1. 情報収集の談話全体の展開方法」、「2. 情報収集の話段の展開方法」、「3. 日本語の情報収集の談話の相互作用に基づく展開方法」の3項目に基づく授業実践が、情報収集の談話展開の方法を学習するために有効であることが確認されている。

4. 情報収集活動における談話展開についての詳細な分析、考察を行っている点は、従来の研究を乗り越えるものとして評価できる。また、そこで得られた成果を、日本語の会話教育につなげるために、実際の授業実践として試みた上で、その分析、考察を行っていることにも、日本語教育学の論文としての意義が認められる。

一方、本論文における問題点は、次のとおりである。

1. 日本語母語場面と接触場面の談話展開の違いに関する調査結果に基づき、韓国人上級学習者を対象とする会話クラスの指導内容が決められているが、韓国語には韓国語の談話の展開方法があると予想されることから、日本語母語話者の談話展開の方法に近づけることを学習目標とすることが妥当か、やや疑問がある。また、本論文では、韓国人上級学習者を対象とした実践が述べられているが、他の言語を母語とする学習者や中級学習者への応用の可能性はあるか、議論が求められる。

2. 会話クラスにおける実践は、韓国人上級学習者を対象に行われており、学習者に会話の文字化をさせているが、日本語専攻生以外の一般の学習者の場合は、文字化

が難しい恐れがあるので、文字化に代わる方法も必要ではないか。また、最終的に  
行われた会話教育実践が、既に実際の教育現場で行われているような授業であり、  
やや小さく収まってしまった印象が残される。研究成果を生かした独創的な教育実  
践が望まれる。

3. 日本語学習者を対象とした会話教育に提言することを目標とした場合、プロの NHK  
インタビュアーと大学教授による談話（内容は「隠れ糖尿病」）のようなデータを対  
象とすることに若干の違和感が残った。おそらく日本語学習者に最も近い場面は 3  
つ目の就職活動が想定されるのではないだろうか。談話の展開方法がスムーズであ  
ることがより多くの情報を引き出すために重要であるという視点は理解できるが、  
母語話者、しかも NHK インタビュアーの規範的な談話展開のデータをもとに行った  
分析を日本語教育の会話教育に応用するということには、さらなる議論が必要であ  
るように思われる。

4. 日本語の情報収集に用いる表現形式の分析が「特徴」「表現形式」「発話機能」別  
に挙げられているが、これらの記述は不十分であると言わざるを得ない。特に、応  
答に対する反応としての「へー。」「おー。」「ほー。」「あー。」などの感動詞  
に関しては、イントネーションや発話のタイミングなどの音声特徴が発話機能に大  
きく影響するにも関わらず、単に（受容・承認）とラベリングされている点に課題  
が残る。

#### <本論文の判定>

上記のように考察されるべき今後の課題は残されているとしても、本論文は、優れ  
た学術研究として評価することができる。よって、本論文をもって日本語教育学の博  
士学位論文に値するものと判断できる。

なお、本論文にあった誤記等は、添付の「日本語教育研究科 博士学位申請論文修正  
リスト」のとおり修正されたことを確認した。



博士学位申請論文題目		日本語教育のための情報収集の談話の展開方法 — 韓国人日本語学習者の会話教育の提案 —	
申請者		小林 友美	
修正リスト提出日		2017年 8月 21日	
ページ番号・行		修正前	修正後
1	目次・10の2. 1	日本語の	日本語学の
2	図表目次の番号	【表3-6】	【表3-3】
3	4・17	全16資料	全8資料
4	24/88【表2-3】のゲスト	U（男性）	U（女性）
5	24/88【表2-3】のゲスト	U（女性）	C（女性）
6	24・注8下から1	2012年同年	同年
7	34/257・【表3-1】の注	「Ⅱ. 談話表紙」	「Ⅱ. 談話表示」
8	59・【表5-9】小話段	(9)家族の対応策	(10)家族の対応策
9	59・【表5-9】小話段	(10)業界の社会的責任	(11)業界の社会的責任
10	105・12	小池	K
11	142・下から2	「Ⅱ. 終了部」	「Ⅲ. 終了部」
12	144・6	「3.3 助言を求める質問」	「3. 助言を求める質問」
13	154・下から6	【資料3-7】	【資料3-11】
14	184・【表27】	【資料10】	【資料3-10】
15	191・【表29-1】Ⅲ. 小話段	①事実を求める質問	1. 事実を求める質問
16	191・【表29-1】Ⅲ. 小話段	②意見を求める質問	2. 意見を求める質問
17	191・【表29-1】Ⅲ. 小話段	③助言を求める質問	3. 助言を求める質問
18	205・2	松浦（2012）松浦・小川	松浦（2012）、松浦・小川
19	220・10	1. 談話構造	1. 情報収集の談話全体の展開方法
20	220・10	2. 質問の提出順序	2. 情報収集の話段の展開方法
21	220・10-11	3. 応答者を意識した談話展開の方法	3. 日本語の情報収集の談話の相互作用に基づく展開方法
22	233・【表36-5】	網掛けの色	網掛けの色を全体に薄くする
23	257・1	（再	（再掲）手書き部分を入力
24	260・下から2	〈Ⅲ. 4 説明要求〉	〈説明要求〉
25	260・下から1	〈Ⅲ. 2 判定要求〉	〈判定要求〉
26	263・下から9	「2.意見を問う質問」	「2.意見を求める質問」

27	265・2	「質問 1－応答－反応	「質問 1－応答 1－反応 1
28	269・10	電子情報通信学会発表予稿集	『電子情報通信学会技術研究報告』 108. pp. 33 - 36
29	270・6	(2010)「日本語の	(2010)「日本語の
30	271・3	『異文化間問題教育』	『異文化間教育』
31	談話資料目次、下から 8	「ピーぷる Nさん」	「ピーぷる Uさん」

日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト